

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr. Hanem Ahmed

カイロ大学文学部日本語日本文学科

**Analysis of Japanese Articles “Ni” and “De” Acquisition
Process and Errors made by Arabic-speaking
Egyptian Japanese Language Learners
Dr. Hanem Ahmed
Japanese Department, Faculty of Arts, Cairo University EGYPT**

Abstract in English:

This paper targets Arabic-speaking Egyptian Japanese language learners who have rarely been covered by previous studies. This paper has discussed the acquisition process of the Japanese articles “Ni” and “De” by Arabic-speaking Egyptian Japanese language learners.

Previous studies have featured Chinese learners of Japanese, Korean learners of Japanese, and native English learners of Japanese in numerous studies, but native Arabic learners of Japanese are not covered.

In this paper, the author has covered a wide range of functions of both articles “Ni” and “De” and didn’t limit the functions to the "Place Case" or "Existence" cases only. The study has analyzed a number of 120 compositions written by Egyptian students of Japanese language learners at Cairo University, and Misr University for Science and Technology.

The collected compositions were written by the students for 6 months. In addition, the learners themselves were interviewed and were asked about the selection criteria they used when they selected these articles. This study revealed that both positive and negative transfers from the mother tongue influence the learners’ acquisition of both articles.

The usages with a positive transfer of the article “Ni” could be seen at the functions of "results of change", "change of state", and "movement towards destination", all of which are translated into Arabic as "li" and "ʔiʔa:". Other usages that have a positive transfer from Arabic include "the subject of the giver" and "passive agent", where the Arabic preposition equivalent to "ni" used in these usages is "min". If the Arabic preposition equivalent to "ni" is "li", "ʔiʔa:" or "min", the positive transfer from Arabic works actively.

The study also revealed that there is a usage in which the positive transfer from Arabic is working even in "de". An example is

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

a usage of "means". The Arabic preposition corresponding to this usage is "bi", and it was found that the learners actively and correctly used it.

On the contrary, some usages are often confusing to Egyptian learners because of the negative transfer from the mother tongue. The "existence" function or usage of "Ni" and the "action" usage of "De" are the main examples of the negative transfer.

The preposition used in Arabic is "fi" in both "existence" and "action" usages, which confused learners and led to frequent errors.

Also, through the interview that has taken place with the learners, the study revealed that the learners tend to formulate a unit formation. Units such as "country name + de" and "era + de" are formed frequently by the learners. When the learners were asked about the reasons, they answered that their understanding is "ni" is used in a narrow space or at a specific time, while "de" is used in a wide space such as a country or at an indefinite time.

Arabic and Japanese tend to be recognized as languages that have little in common, but as we have seen in this study, there are some places where the positive transfer of Arabic is working, and there is a common concept between the two languages in some concepts. Focusing on explaining these commonalities to learners when introducing "particles" may improve the learning process.

Conversely, if the Japanese teacher understands the differences between the learners' native language, Arabic, and the target language, Japanese, the causes of the learners' misuse of some functions and items that are expected to be difficult to learn will become clear. As it comes, it is expected to lead to improvement in the learning process.

No Japanese textbooks currently used in Egypt have been developed for Arabic-speaking Egyptian Japanese learners, but based on the results obtained in this study, the influence of the learners' mother tongue could be used and contribute to the learning process improvement.

This study could be a step towards creating textbooks that take into consideration the learners' mother tongue influence.

Key Words: Positive transfer Negative Transfer Unit Formulation.

دراسة حول تعلم طلاب اللغة اليابانية من الدارسين المصريين لأدوات "De" "Ni" باللغة اليابانية

د. هانم أحمد

قسم اللغة اليابانية- كلية الآداب- جامعة القاهرة

ملخص باللغة العربية:

تستهدف هذه الدراسة الدارسين المصريين للغة اليابانية من الناطقين باللغة العربية والذين نادرا ما تم التعرض لهم من قبل الدراسات السابقة. هذه الدراسة ناقشت عملية تعلم حروف الجر اليابانية "Ni" و "De" للناطقين باللغة العربية من الدارسين المصريين. تناولت العديد من الدراسات السابقة دارسين صينيين للغة اليابانية ودارسين كوريين للغة اليابانية، وكذلك دارسين لغتهم الأم هي اللغة الإنجليزية، ولكن لم يتم التعرض لدارسي اللغة اليابانية من أصحاب اللغة العربية كلغة أم.

في هذه الدراسة، استهدف الباحث مجموعة واسعة من الوظائف في كل من حرفي الجر "Ni" و "De" ولم تقصر الدراسة الوظائف على حالات "حالة المكان" أو حالات "الوجود" فقط كما قامت العديد من الدراسات السابقة بالطلاب الصينيين والإنجليز وغيرهم. قامت الدراسة بتحليل ١٢٠ موضوع تعبيرية كتبه الدارسون المصريون من دارسي اللغة اليابانية بجامعة القاهرة وجامعة مصر للعلوم والتكنولوجيا. حيث كتب الطلاب هذه الموضوعات خلال ٦ أشهر دراسية. بالإضافة إلى ذلك، تم إجراء مقابلات شخصية مع الدارسين أنفسهم وسؤالهم حول معايير الاختيار التي استخدموها عند اختيارهم لهذه الأدوات أو الحروف.

أظهرت هذه الدراسة أن كلا من التأثيرات الإيجابية والسلبية من اللغة الأم تؤثر على اكتساب المتعلم لحرفي الجر محل الدراسة و وظائفهم المتعددة. ويمكن رؤية التأثير الإيجابي للغة الأم في تعلم وظائف معينة لحرف الجر "Ni" مثل وظائف "نتائج التغيير" و"تغيير الحالة" و"التحرك نحو الواجهة"، وكلها تُترجم إلى العربية كـ "لِ" أو "إلى".

تشمل الاستخدامات الأخرى التي لها تأثير إيجابي من اللغة العربية حينما يعبر الحرف عن "المانح"، حيث يكون حرف الجر العربي المكافئ لـ "ni" المستخدم في هذه الاستخدامات هو "من".

إذا كان حرف الجر العربي المكافئ لـ "ni" هو "لِ" أو "إلى" أو "من"، فإن التأثير الإيجابي من اللغة العربية يعمل بشكل فعال.

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr. Hanem Ahmed

カイロ大学文学部日本語日本文学科 ・ エジプト

キーワード 正の転移 負の転移 ユニット形成

1. 序論

日本語の助詞習得に困難を感じる学習者が多いことは既に多くの研究により取り上げられている。特に、「は」と「が」や、「に」と「で」、「に」「で」「を」の使用混乱が良く見られる。助詞習得には母語の影響もあることは既に研究で取り上げられ、「に」「で」や「は」「が」に似たような助詞がある母語話者ならこれらの助詞は比較的習得しやすいことも指摘されている。もちろん、場合により、使用過剰もあることが指摘されている。

しかし、自分の母語に場所を表す助詞や前置詞には「に」と「で」の区別がない学習者にとって、この概念自体理解するまで時間がかかる。本文で使用した学習者の作文では、「*日本では面白いことわざがある」や、「電車を乗った」のような誤用が多く見られた。

本論文では、今までにほとんど取り上げられたことがないエジプト人日本語学習者を対象にし、アラビア語を母語とするエジプト人日本語学習者の「に」「で」の助詞の習得および誤用を取り上げた。

先行研究では、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者や英語母語話者日本語学習者が数多くの研究で取り上げられているが、アラビア語母語話者の日本語学習者はそうではない。

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

本論文では、アラビア語エジプト人日本語学習者における「に」「で」の「存在」の機能や「場所格」だけでなく、これらの助詞の用法を包括的に取り上げ、習得経過および誤用を分析した。本論文では、まず、アラビア語エジプト人カイロ大学の日本語学習者が6カ月に渡り、書いた作文を分析し、正用および誤用の両方を分析した。さらに、学習者自身はこれらの助詞の選択の際、どのような選択基準に基づいて選択したか理解するため、学習者にインタビューをした。

2. 先行研究

前述の通り、場所格を取り上げた先行研究は数多くある。その例として、岩崎（2001）、蓮池（2004）、（2007）、（2012）、松田・斉藤（1992）などが挙げられる。これらの研究に加え、「に」と「で」の混同は迫田（2001）、久保田（1994）、でも指摘されており、学習者は「に」を使用すべきところで、「で」を使用し、その逆のケースも見られ、これらの助詞を混同し、どれがどこを使うべきか判断ができないケースが多いことが報告されている。また、岩崎（2001）では、31名の英語母語話者初級学習者を対象にし、英語母語話者日本語学習者の中には「に」=in、on、towards、「で」=at、with、byと、英訳に依存して、母語から影響を受け、これらの助詞の選択や区別の際、英語に依存する者がいたと報告し、日本語の場所格の使用に学習者の母語転移がかかわっている可能性を示唆している。

また、中国語母語話者日本語学習者や韓国語母語話者日本語学習者を取り上げた研究として、蓮池（2012）が挙げられ、中国語母語話者文章では、「に」の過剰使用が目立ったのに対し、韓国語話者の文章には「で」の過剰使用が目立ったことを指摘しており、学習者の母語が異なると誤用の傾向や原因が異なることを説明した。

横断的研究に加え、縦断的な研究も見られ、久保田（1994）では、2名の英語母語話者日本語学習者を縦断に調査し、英語母語話者日本語学習者の文では、「に」助詞の過剰使用が見られたことが報じられている。松田・斉藤（1992）では、韓国語学習者を対象にした縦断研究を行い、学習者は「で」を過剰一般化していると報告している。

母語の転移を調査した論文として、蓮池（2007）が挙げられ、韓国語母語話者、中国語母語話者、英語母語話者を対象にした結果、韓国語母語話者の日本語学習者に母語からの直接的な転移は

「に」の過剰使用に見られ、日本語の空間表現の選択に学習者の第1言語からの転移が深く関わっていることを指摘した。

しかし、蓮池（2012）では、第一言語の負の転移だけでなく、正の転移も挙げられ、韓国語母語話者の日本語学習者は日本語の格助詞の学習の際、日本語と韓国語の格助詞の類似点がプラスに働き、韓国語話者は初中級の段階から中国語母語話者、英語母語話者の学習者より、特定の動詞の存在に影響されることが少なく、比較的正確な助詞選択ができることを報告している。しかし、

「住む」「勤める」「乗る」動詞がとる助詞は韓国語と日本語が

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

異なるため、助詞の正答率が低くなり、負の転移も働くことが観察されたことを報告した。

「に」と「で」を研究で取り上げられる場合、場所格として取り上げられることが多いが、(下野 2005) は珍しく、これらの助詞を包括的に取り上げ、16名の英語母語話者日本語学習者(カナダ在住)を対象に、「に」の習得を包括的に取り上げた。その結果として、英語母語話者日本語学習者は初級中級では、「受益文・与益文・受動文」の正用率が低く、場所、時間の正用率の方が高いと報告している。

上記の通り、学習者の正用には母語の正の転移、誤用には母語の負の転移が働くこと示唆する先行研究も多い。しかし、これらの研究は「場所格」などの「に」の限られた意味や機能を調査した他、データ収集法として、穴埋めテスト、正誤判断テスト、漫画などが使われ、学習者のアウトプットが自由に見られる方法が使われていない先行研究がほとんどである。

本論文では、学習者のインタビューの回答と実際の作文における「に」「で」の使用状況、正用・誤用を分析し、先行研究で取り上げられた言語転移(正・負)の可能性も含めて、アラビア語を母語とする日本語学習者の「に」と「で」の習得における問題点を分析したい。

3. 調査方法

3.1 対象者と調査方法

本稿の対象者は、カイロ大学文学部日本語日本文学科およびミ
スル科学技術大学日本語学科の 20 名の日本語学習者である。調
査方法は、作文による調査と理解（フォローアップ）調査の 2 つ
に分かれる。対象者が 6 カ月に渡り、書いた 120 件の作文を分析
し、「に」と「で」それぞれの正用・誤用傾向を分析した。分析
後、フォローアップ調査を実施し、対象者に母語による「に」と
「で」に関する理解（フォローアップ）理解調査を行った。

作文収集の段階では学習者の日本語学習歴は 13 カ月で大学 2
年生だった。作文の収集は、『みんなの日本語 I . II』の導入終了
直後に始め、6 カ月に渡った。

調査の対象者は、『みんなの日本語』の 2 課毎に課末テストと
いわれるテストが定期的に行われ、「助詞」穴埋め問題を含めた
課末テストを実施している。課末テストなども実施されているた
め、学習者は「に」「で」について複数回に渡り、指導を受けて
いる。

3.2 調査

3.2.1 作文調査

前述の通り、本稿では作文における「に」と「で」の用法を包
括的に分析し、「に」と「で」の正用・誤用の両方を分析し、
「に」と「で」の用法別の正用率・誤用率および誤用傾向を分析
した。本調査にて取り上げた作文テーマは『初級からの日本語ス

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

ピーチ』における「結婚」「習慣の違い」「社会問題」「結婚」「ゴミ問題」と、『—みんなの日本語—やさしい作文』における「楽しい一日」「私の夢」と、自由記述の作文である。知らない単語がある場合、辞書使用を可能にした。

3.2.2 理解（フォローアップ）調査

作文調査の実施後、学習者にアラビア語による理解（フォローアップ）調査を行った。学習者の回答を分析した。学習者が自分の理解を自由に伝えるため、フォローアップ調査をアラビア語で実施した。分析の際、学習者のフォローアップ調査の回答と実際の作文における「に」使用を対比させ、学習者の理解は作文に現れているか分析した。フォローアップ調査の設問は以下の通りである¹。

- ◇ ①「に」「で」に相当するアラビア語の前置詞は何か。
- ◇ ②日本語における「に」「で」の用法、意味は何か。
- ◇ ③「に」と「で」の違い
- ◇ ④「に」「で」の習得が困難な点があれば、述べなさい。

4.本稿において取り上げる「に」の用法

本稿で取り上げる「に」の用法は、先行研究の竹林（2007）、益岡・田窪（1987）、寺村（1982）や加藤(2006)などを参考にした。（目的、複合助詞、慣用句）などは本稿の分析対象外とした。本稿で取り上げる用法は以下の表 1 にまとめたものである。使用

回数は全対象者が実際作文において、各用法における使用した回数を順に並べたものである。

表 1 : 「に」の用法と使用回数

用法	例文	使用回数
① 変化の結果	教師になる。～に変わる	234
② 順序・時点	彼は最後に来た。3時に会議がある。	163
③ 着点	住む、乗る、着く	120
④ 存在	駅の前にスーパーがある。	107
⑤ 対象	提案に賛成する	73
⑥ 受益者・ 受け取り手	買う、あげる、やる、NはNにNをV	66
⑦ 移動到達点	戻る、来る、帰る、行く	65
⑧ 相手	友人に会う	51
⑨ 受与者の主体	V～てほしい	35
⑩ 使役の動作主	子供にピアノを習わせる	21
⑪ 受け身の動作主	先生に怒られる	15

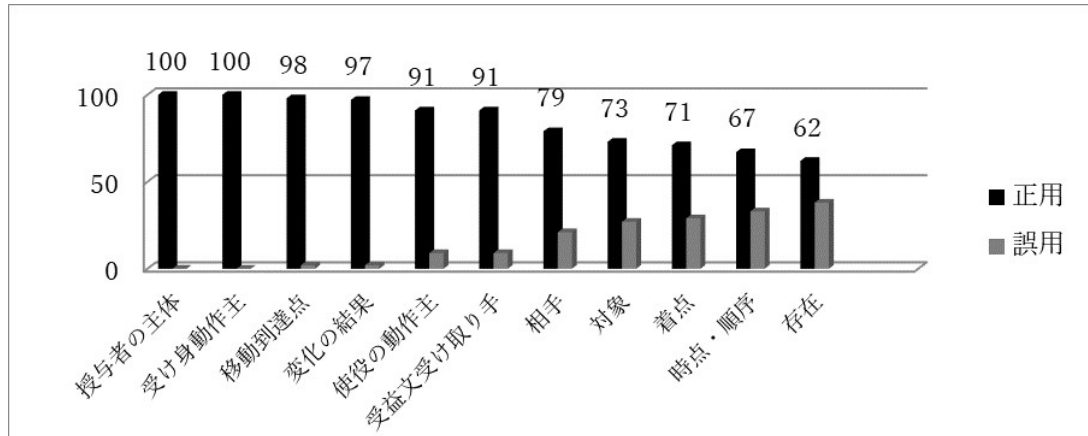
図 1 は「に」助詞の用法別の正用率を示している。

図 1 : 「に」助詞における用法別の正用率

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)



4.1 「に」の使用状況と正用率と母語の影響の分析

表1の通り、学習者が一番多く使用した用法は「変化の結果」である。「大きくなったら教師になりたい」はその用法の例である。学習者はこの「変化の結果」の用法を234回使用し、一番使用回数が多かった。使用回数が多かっただけでなく、使用状況の正用率も分析したところ、図1の通り、正用率が97%であると正用率が高いこともわかった。

つまり、学習者はこの用法を正しく使用しており、ほかの助詞を使うべきところで間違っ「に」を使用するような過剰使用もほとんど見られず、誤用率は3%にとどまっている。

言い換えれば、学習者は「～に変わる」「～になる」という、モノや人間などがある状態からある状態へ変わる状況を説明する場合、何らかの助詞が必要である規則を習得していると言える。

また、その助詞は「で」や「を」などとの使用混同をすることがなく、「に」を使用すべきことも正しく理解していると言える。

前述の通り、本稿で取り上げる「に」の用法は11もあり、「変化の結果」のように正用率が97%という高い正用率の用法もあれば、「存在」のように図1の通り、正用率が62%にとどまっている用法もある。正用率が高いことから、「変化の結果」は「存在」用法に比べ、比較的習得しやすいと思われる。その背景には、学習者の母語であるアラビア語からの正の転移があると思われる。

アラビア語において「状態の変化」や「変化の結果」用法を表す場合、日本語の「に」に相当する「li」「ʔi[ɑ:]」という前置詞が使用される。すなわち、この点は日本語もアラビア語も同じコンセプトを持っており、状態が変わることを両言語で描写する際、何らかの「マーク¹⁾」が必要であり、日本語の場合はそのマークというのは助詞に相当し、アラビア語の場合は前置詞が使用されるという両言語において助詞や前置詞が使用されるという共通点がある。

そのため、学習者にとって、日本語では「変化の結果」では何らかの助詞を使用しなければいけないことは容易に理解が出来ると思われる。なぜならば、この点に関しては学習者の母語であるアラビア語と目標言語である日本語が同じ原則を持っているからである。例えば、「花びらが赤に変わった/なった」文をアラビア

¹⁾ 「マーク」ここでいうマークは日本語では助詞、アラビア語では前置詞あるいは語尾変化のことを意味する。

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

語でいうと、「taḥawwala alward ʔiʔa:l-ʔaḥmari」になり、前置詞が使用されることによってある状態からある状態へ花の状況が変わったことを表す。すなわち、両言語では変化を表すのに、助詞や前置詞が使用され、その変化が起きる名詞にも変化が起き、助詞や前置詞が前か後ろにつくことは理解しやすい規則と思われる。上記の「変わる」「なる」動詞が使用される場合、前置詞が使用されることもあれば、前置詞を使わずに名詞に語尾変化をすることもある。すなわち、「～になる」「～にする」では「li」「ʔiʔa:l」が使用されないこともあるが、その代わりに、語尾が変わるので、いずれの場合にして、「変化の結果」では名詞の前か後かのどちらかに必ず何らかの変化が起きることに変わりがない。

前述の通り、アラビア語では前置詞が前につくか、後ろに語尾変化が起きるかのどちらかのマークを通じ、変化が起きたことを表す。日本語においても「変化の結果」では助詞が付くことを通じて、変化が描写されるので、両言語は共通した概念を持つため、学習者にとって「変化の結果」における「に」助詞の習得は容易と思われる。

また、学習者は変化の結果では、「に」を使用すべきか、「で」を使用すべきか、それともほかの助詞を使用すべきか、という助詞の間での使用混同がほとんど見られなかった。学習者の実際の使用の分析と理解調査の回答を通じて、ほとんどの学習者は「変化の結果」では「に」が使用されるべきことは問題なく習得していることがわかった。

後述するように、「存在」の用法では、「に」と「で」との混同による誤用が数多く見られたが、「変化の結果」で使用される「に」に関し、「で」と混同することがみられなかった。

その背景には「変化の結果」用法は「存在」用法と異なり、使用される動詞により、使用される助詞「に」になったり、「で」になったりすることがないという理由がある。「変化の結果」では、どのような動詞が使用されたか関係なく、全ての場合「名詞」の後に「に」が使用されるのに対し、「に」の「存在」用法では、使用される動詞の意味や性質により助詞選択が決定され、「に」になるケースもあれば、「で」になるケースもある。

例えば、「ある」という動詞はただ単に「ものがある」と表す場合、「存在」の用法になり、「に」を使用することになる。しかし、「地震があった」「祭りがあった」などと、「出来事が起きた」という意味の場合は「存在」用法ではなく、「動作」用法になるため、「に」が使用されず、「で」が使用されることになることは日本語母語話者なら当たり前のよう知っている事実だが、アラビア語を母語とするエジプト人日本語学習者からみて、「ある」という同じ動詞であるにもかかわらず、どうして使用される助詞が異なるかは習得し難いことである。それは、アラビア語の場合、「存在」用法においても「動作」においても文で使用される前置詞が変わることがなく、日本語のように「存在」と「動作」で使用される助詞が異なってくるというコンセプトがないからである。

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

例えば、「存在」「動作」で使用される「に」と「で」のこれらの二つの助詞をアラビア語に訳すと、二つとも「fi」という同じ前置詞になる。「fi」はある場所の中で動作をする、あるいはある場所の中に存在するという意味を持つ。すなわち、「動作」の場合でも「存在」の場所でも使える。そのため、その動詞は「動作」であるか「存在」であるか関係なく、「fi」自体「動作」の意味を持つ動詞にも「存在」の意味を持つ動詞にも使える。

そのため、アラビア語を母語とする日本語学習者にとって「に」と「で」の区別が非常に難しく、判別の仕方習得が困難である。

「存在」用法では、学習者の母語であるアラビア語にはこのような区別がないため、学習者は日本語のこれらの助詞の習得過程では、自分の母語に助けてもらえないどころか、逆にアラビア語にこのような区別がないため、アラビア語に邪魔され、負の転移が起きてしまうと見られる。

アラビア語では使用される動詞は「存在」を表す動詞でも、「動作」を表す動詞でも、同じ「fi」前置詞が使用されるため、学習者にとってなかなか理解しがたい規則である。学習者にとってどうして日本語では二つの助詞の間に選択しなければいけないか混乱を起こしてしまう。

上記で見た通り、「変化の結果」では学習者の正用率が非常に高く、学習者の「変化の結果」習得では母語からの正の転移が見られたのに対し、「存在」「動作」では、「変化の結果」と逆の

状況があり、学習者の母語であるアラビア語は「存在」用法では、学習者の母語からの負の転移がマイナスに働いていると考えられる。使用される動詞の性質や意味によって、「存在」になったり「動作」になったりすることにより、使用される助詞も「に」になったり「で」になったりすることはアラビア語を母語とする日本語学習者にとって新しいルールであり、自分の母語にないコンセプトであるため、習得するまで時間がかかると思われる。

「変化の結果」「状態の変化」に比べ、「存在」用法の習得が比較的難しいと言える。「変化の結果」「状態の変化」と「存在」のこれらの用法には学習者の母語からの正の転移と負の転移が現れ、両方とも学習と習得に影響を与えている。正の転移が機能している「変化の結果」では正用率が97%であるのに対し、母語がマイナスに機能している「存在」「動作」では正用率が62%にとどまっており、「に」と「で」の混同による誤用が非常に目立った。

他に、母語からの正の転移がプラスに働いた用法も複数ある。例えば、正用率が高かった用法として、「授与者の主体」「受け身動作主」「使役の動作主」と「移動到達点」「受益受け取り手」が挙げられ、全て91%以上の正用率が見られた。各用法の例および相当するアラビア語前置詞使用状況は表2にまとめた。

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

表2 正用率が高い用法および相当するアラビア語の前置詞

用法	例文	正用率	アラビア語前置詞
「授与者の主体」	母にわかってほしい。	100%	min Or ∅+語尾変化
「受け身動作主」	先生に怒られる	100%	min
「移動到達点」	(戻る、来る、帰る、行く) 日本に戻る	98%	「li」 「ʔi ɑ:」
「受益受け取り手」	(NはNにNをV) 父は売り手にお金を渡した。	91%	「li」 「ʔi ɑ:」 Or ∅+ 語尾変化

表2にある用法の正用率は全て91%以上である。まず、「移動到達点」と「受益受け取り手」を取り上げたい。これらの用法の使用率をみると、それぞれ98%と91%の高い正用率を得ていることがわかる。これらの用法を二つともアラビア語に訳すと、「に」に相当する前置詞は「li」「ʔi|ɑ:」であることがわかる。上記で説明した正用率が高かった「変化の結果」もアラビア語に訳すと、同じく「に」に相当する前置詞はまた「li」「ʔi|ɑ:」だった。すなわち、「変化の結果」も「移動到達点」も「受益受け取り手」も全て学習者の正用率が高かったし、全てアラビア語に訳すと、「li」「ʔi|ɑ:」前置詞が「に」に相当することがわかる。「に」の用法は数多くあるが、その用法はアラビア語の「li」「ʔi|ɑ:」に相当する場合、習得度が高くなる傾向があると言える。学習者にとって、「に」に相当する前置詞はどのような前置詞になるかにより、習得度が変わってくると思われる。言い換えれば、日本語の「に」に相当するアラビア語の前置詞は「li」「ʔi|ɑ:

に」の場合は、「変化の結果」にしても「移動到達点」にしても「受益受け取り手」にしても用法を問わず、学習者の正用率が高くなる傾向があると言え、母語からの正の転移が機能していると思われる。

他に、母語からの正の転移が機能していると思われる用法として「授与者の主体」「受け身動作主」が挙げられ、両方とも正用率が100%だった。「授与者の主体」「受け身動作主」は両方ともアラビア語に訳すと、アラビア語文においても前置詞が必要である。「授与者の主体」「受け身動作主」で使用されるアラビア語の前置詞は「min」である。

すなわち、これらの「授与者の主体」と「受け身動作主」の用法では日本語においても、アラビア語においても、これらの用法を表すのに無格助詞になることがなく、助詞や前置詞が必要になることは共通している。その助詞は日本語の場合、「に」助詞になり、アラビア語では「min」の前置詞になる。

上記をまとめると、日本語の「に」助詞に相当するアラビア語の前置詞は複数あり、その文での「に」の意味により、使用されるアラビア語の前置詞が異なってくる。アラビア語では、各前置詞には独立した意味があるため、日本語のように使用される動詞によって前置詞の選択が左右されることがない。例えば、「fi」は、「ある場所の中で/中に」という意味をもつ。同じく、「li」「ʔiqa:」は「～へ/に/に向かってV」という意味が連想される。しかし、日本語の一つの助詞にはたくさんの機能や意味を持ち、使用される動詞により、どのような助詞になるか決まることはア

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

アラビア語と根本的な違いであると考えられる。そのため、日本語の助詞とアラビア語の前置詞の性質が異なると考えられる。

しかし、両言語の助詞および前置詞の性質が異なると言っても、「に」助詞はその文ではアラビア語のどの前置詞に相当するかは学習者の習得度や正用率に大きく影響していることがわかった。

例えば、「に」はアラビア語の「li」「ʔiqaː」に相当する場合、正用率が高かったことがわかった。同じく、「min」に相当する場合も正用率が高く、学習者の語用が非常に少なかった。それに対し、「に」助詞の意味は「fi」前置詞に相当する場合、正用率は62%にとどまり、誤用が多く見られた。その中で最も見られた誤用は「に」と「で」との混同による誤用だった。

4.2 本稿において取り上げる「で」の用法

表2：「で」の用法と使用回数

用法	例文	使用回数
① 動作	結婚式はホテルで行われている。	103
② 国名は 国名に 国名の	*国名では-----	92
③ 手段	自分のことを自分で守らなければなりません。	55
④ ~で形容詞	エジプトは Cotton の生産で有名です。	43
⑤ 範囲 (場所) (時代)	~で~は V/形容詞 テレビで一番好むのはアニメです。 *この時代で完成した	17 28

⑥ 決まり文句	私の意見では-----。 お陰様で-----。 ~せいで-----。 一方で-----	86
⑦ ~の後は/後に/後に	*~の後に	78
⑧ ~の	*~で	10
⑨ ~から	*~で	26
⑩ ~は~が	*~で	5
⑪ ~へ V~に行く	*映画館やクラブなどで遊びに行く	4

4.3 「で」の使用状況と母語の影響の分析

4.3.1 「動作」の用法

表2で示した通り、本稿で取り上げた学習者の作文を分析し、上記の用法を分析対象にした。学習者のこれらの用法を分析した結果、下記のことを明らかになった。まず、「動作」用法に関しては、正用率が90%であると高い正用率だったことがわかった。「この祭りは北海道で行われる」や「学校で組まれるカリキュラムはよくないと思う」などと、学習者の90%は比較的難しい内容でも文中に使われている動詞が「動作」を表している場合「で」を正しく使用することができたことがわかった。

特に、「結婚式がホテルで行われる」や「北海道でこの祭りが行われる」などといった明らかに「動作」が強い動詞に関して学習者の100%は正しく「で」を使用したことがわかった。それに対し、「学ぶ」などのような明らかな動きや動作が伴わない動詞では、「で」を使用すべきところで「に」が使用される誤用が見

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

られた。例えば、同一学習者は同じ作文に、「学ぶ」を2回使用している例があったが、分析してみると、一回目正しく「で」を使用しているが、2回目に使っている「学ぶ」に対し「に」が使用されていることがわかった。理解調査で、学習者に聞いたところ、「学ぶ」という動詞は「一つの場所にとどまり勉強する意味を表し、激しい動作の伴う動詞」ではないため、「で」を使用すべきなのか、「に」を使用すべきなのか、判断できなかった。そのため、両助詞を交互に使用していると回答した。

すなわち、学習者の90%は正しく「で」を使用していることがわかったが、そこには使用している動詞自体がどれほど、「動作」が明確になっているか影響を与えており、「学ぶ」などのような目に見える動作がない場合、混乱が起きる傾向があり、正用率が低くなるのに対し、「結婚式が行われる」や「遊ぶ」などの動詞の場合、正用率が高くなることがわかった。

4.3.2 「国名+で」のユニット形成

本稿で非常に著しく見られた傾向として、「国名+では」「国名+で」の使用傾向だった。学習者の作文を分析した結果、学習者は「国名」の後に「で」を使用する傾向が非常に目立った。

「*中国でだんだん中流が消えるかもしれません」「*エジプトでたくさんのクラブがある」などのような使用例が非常に多かった。「国名+で」の使用回数は92回あったが、本来、「国名+に」「国名+から」や「国名+は」を使用すべきところで、学習者は「国名+で」を過剰使用する傾向が目立った。

特に、「ある」は存在の意味をする場合、「に」を使用すべき規則を習得している学生でも、「国名」が文中に表れると「に」ではなく「で」を使用してしまう傾向が強かった。そのため、理解調査で学習者に自分が書いた作文の文章において「で」を使用した理由を聞いてみた。興味深いことに学習者は「ある」は存在の意味を表す場合「に」を使用すべき規則は知っていることはわかったが、学習者によれば、それは特定の場所を表す場合であり、例えば「教室」や「家」などといった特定の場所の場合「に」を使用するが、国名という広い空間や広い範囲の場合は「に」ではなく「で」を使用すべきだという規則を作っている学習者が多くいることがわかった。

また、「国名」の後に「で」を使用すべきであるといった間違った理解をしているのは「存在」用法に限られたものではなく、「の」を使用すべきところに「で」が使用されるケースも見られた。「国名+で」というユニット形成が強く、上記で説明した「存在」用法に加え、「の」を使用すべき箇所でも、「で」の使用例が見られた。例えば、「エジプトのいくつかの習慣が嫌いだ」というべきところで「*エジプトでいくつかの習慣が嫌いだ」、あるいは「エジプトの教育内を改善しなければならない」という文章を「*エジプトで教育内容を改善しなければならない」と「国名」の後に「で」の使用を好む結果により、比較的不自然な文章になる傾向がみられた。

また、学習者は初級で学習する「日本は山が多い」という「NはNが形容詞・動詞」を使用すべき箇所は作文中に見られたが、

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

学習者は「～は～が形容詞・動詞」を使用せずに、「は」の代わりに「で」が使用された例が目立った。例えば、「エジプトは収入が高いが、、、」と書くべきところで、学習者は「*エジプトで収入は高いが、生活にお金がかかる」と、この規則においても「国名+で」のユニット形成が見られた。

上記で見られた「国名+で」のユニット形成には2つの理由が背景にあると思われる。一つ目には学習者自身が作った解釈によるものである。理解調査を通じて学習者は教室や自分で見る日本語の番組などで「国名」の後に「で」が使用されることが多いと回答し、そこから「国名」の後に「で」を使用すべきであると判断し、その解釈には「国」は広い空間であるため、広い空間の場合「に」ではなく「で」を使用すべきと関連性を作ったことがわかった。

もう一つの理由として考えられるのは母語からの負の転移である。例えば、日本語では「エジプトのほとんどの人口は中流階級だ」という文章では「の」が使用されるが、この文章をアラビア語に訳すと「の」に相当する前置詞は「fi」になる。4.1で前述した通り、「fi」は日本語の「に」にも「で」にも相当し、「存在」にも「動作」にも使用できる。「エジプトのほとんどの人口は中流階級だ」では「fi」は「の」に相当するため、学習者は「fi」を直訳し、「で」を選択し、「の」を使用しない。

そのため、「*エジプトでほとんどの人口は中流階級だ」や「エジプトの教育を改善しなければならない」というべき文章を

「エジプトで教育を改善しなければならない」のような不自然な文章が見られる。

上記をまとめると、本稿では、アラビア語を母語とする日本語学習者は「国名+で」というユニット形成をしていることがわかった。その背景には二つの理由があり、一つ目は学習者自身の間違った解釈によるものと、学習者の母語からの負の転移の二つである。間違った解釈とは、学習者は、場所は国などのような広い空間の場合「で」を使用すべきと考えており、それに対し、特定の狭い場所の場合「に」が使用されると解釈をしている。

二つ目の理由は、学習者からの負の転移であり、「で」はアラビア語の「fi」に相当するため、学習者は日本語の文章を直訳し、その訳に基づいて使用する助詞を選択しているため、日本語では「の」を使用すべき様な文章でも、学習者は自分の母語に訳し、「fi」は「で」に相当するものであるとの解釈に基づき、「で」を選択する傾向があることがわかった。アラビア語の文章で「fi」が使用される場合、学習者は「の」「は」「での」などの助詞を無視し、選択肢を「に」と「で」だけに限定する傾向があると言える。

4.3.3 「特定の時間+に」「不特定の時間+で」の学習者の仮設について

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

4.3.2で分析した「国名+で」に加え、学習者の文章を分析した結果、「*この時代で完成した」「*イスラム時代でできた」などといった「時代+で」のユニット形成も見られ、「時代」の使用回数は30回だったが、その内「時代+で」の使用回数は28だったと圧倒的に多いことがわかる。

理解調査で学習者に「時代+で」の使用背景について質問した結果、「国名+で」のユニット形成と同じ回答が得られた。「～時」や「～日」などといった「特定」の時間の場合には「に」を使用すべきだが、「時代」などは「不特定」であるため、「で」を使用すべきだとの回答が得られた。

学習者は場所に関しても時間に関しても「に」は「特定」の場所や時間を表すのに対し、「で」は範囲が広く、不特定の場所や時間を表すものだという解釈を持っていることがわかった。

また、「時代+で」を学習者のアラビア語に訳すと、「時代」の前に使用される前置詞は「fi」になる。

上記で説明した通り、学習者にとって「に」に相当するアラビア語の前置詞が「li」「ʔilɑː」の場合、正用率が高くなる傾向があるのに対し、「fi」になると、正用率が低くなる。

「で」の用法においても、「で」に相当するアラビア語の前置詞は「fi」になると誤用率が高くなる傾向があると言える。

アラビア語の前置詞の「fi」は用法により、「に」にも「で」にも相当することがあるため、学習者の「に」「で」の助詞の習得過程には「fi」は混乱を起し、学習者は自分の母語に訳して

も日本語の「に」も「で」もそして時々「に」も「fi」になるため、学習者の母語のアラビア語による母語の負の転移が起こり、使用混同が起きる。そこで、学習者の多くは自分なりの助詞同士の区別の仮説をたて、上記で述べた通り、「特定」の場所や時間の場合「に」、広い空間の場合「で」といった解釈に頼ることがわかった。

4.3.4 「後+で」の過剰使用について

本稿の学習者の作文を分析した結果、学習者は「後+で」を過剰使用していることがわかった。学習者の作文中の「後+で」の使用回数は78回あった。「*革命の後でフランスの経済はともよくなった」はその例である。これらの文章を分析したところ、「後」「後は」や「後に」を使用すべきところにおいて、学習者は「*後で」を過剰使用していることがわかった。

理解調査ではこの使用状況の理由について学習者に聞いたところ、数多くの学習者は「後で」を一つのジャンクあるいは一つのフレーズとして覚えていることがわかった。学習者にさらに質問すると、常に日本語の教師、日本人の友達や日本のドラマで「後で」を耳にするため、「後」の次に必ず「で」が来るものであると学習者が解釈していることがわかった。学習者から見れば、「後で」は「~せいで」、「おかげで」や「私の意見では」と同じものであると間違った解釈を持っている学習者が多いことがわかった。

学習者が作文中に使った「~せいで」、「おかげで」や「私の意見では」は86回あり、正用率100%だった。学習者にとって、

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

「～せいで」、「おかげで」や「私の意見では」のように一つのフレーズとして使用できる項目を積極的に正しく使用することが明確である。

4.3.5 「手段」用法の習得状況について

本稿でとあり上げた「で」の用法の一つは「手段」である。学習者が書いた作文にて「ナイフで切る」や「自分のことを自分で守らなければならない」のような「手段」用法の文章は55回表れた。これらの文章の正用率を分析してみたところ、99%だったと非常に正用率が高かったことがわかった。

理解査においても学習者に「手段」の用法について聞いたところ、「手段」用法の習得が困難との回答が一つもなかった。学習者の母語であるアラビア語の「手段」用法の「で」に相当するアラビア語前置詞は「bi」である。

「手段」用法の「で」はアラビア語の「bi」に一对一で訳せるため、この用法には母語からの正の転移が起きていると思われる。

他に、アラビア語に訳すと同じく「bi」になる用法は「～で形容詞」の文型である。「エジプトはコットンで有名です」はその文系の例である。本稿の文中の出現回数が低かったため、一般化はできないが、この用法の正用率は100%だった。「エジプトはコットンで有名です」をアラビア語に訳すと、この用法の「で」に相当するアラビア語の前置詞は「手段」の用法と同じく「bi」になる。

「で」の用法に関係なく、相当するアラビア語の前置詞は「bi」になると、学習者の正用率が高くなるという関係が示唆できると思われる。その背景には、「fi」のように「存在」にも「動作」にも使用できるといった混同を起こしてしまうような原因がないから、学習者にとって習得しやすいと思われる。

5. 終わりに

本稿で、アラビア語を母語とする日本語学習者の「に」と「で」の複数の用法における習得状況、誤用例、誤用の原因をみてきた。「に」と「で」の両方の助詞の用法において、学習者の習得には母語からの正の転移と、負の転移の両方が影響していることがわかった。

例えば、正の転移が起きており、正用率が高かった用法としては、「変化の結果」「状態の変化」「移動到達点」が挙げられ、どれもアラビア語に訳すと、これらの「に」の用法に相当する前置詞は「li」「ʔi{ɑ:}」になる。他に、アラビア語からの正の転移が起きている用法としても、「授与者の主体」「受け身動作主」が挙げられ、これらの用法で使用される「に」に相当するアラビア語の前置詞は「min」である。「に」に相当するアラビア語の前置詞は「li」「ʔi{ɑ:}」「min」の場合、アラビア語からの正の転移が機能し、他の用法と比べ習得が良くなり、正用率が高くなる傾向があると思われる。

「で」においても、アラビア語からの正の転移が機能している用法があることがわかった。その例として、「手段」の用法があ

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

げられる。この用法に相当するアラビア語の前置詞は「bi」であり、学習者は積極的に正しく使用していることがわかった。

逆に、母語からの負の転移が影響し、使用混同が非常に多く見られた用法もある。「に」の「存在」用法と「で」の「動作」用法があげられる。アラビア語で使用される前置詞は「存在」用法においても、「動作」用法においても「fi」であるため、学習者は混乱を起し、両方の助詞の使用混同が多く見られた。

また、学習者は自分の母語には「に」「で」の「存在」「動作」のこれらの用法の区別がないため、自分でユニット形成を作っていることがわかった。「国名+で」「時代+で」といったユニット形成をし、「に」は狭い空間や特定の時間を指す時に使用し、「で」は国などのような広い空間や不定の時間を指す時に使用するものだといった間違った解釈をしていることがわかった。

他に、教師トークによる誤用も見られ、「後で」は一つのフレーズとして暗記している学習者が数多くいることがわかった。

アラビア語と日本語は共通点が少ない言語のように思われがちだが、本稿で見てきた通り、アラビア語の正の転移が機能している箇所もあり、両言語の共通概念も見られたところもある。「助詞」導入の際、これらの共通点を学習者に説明することに重点を置けば、習得過程が良くなる可能性がある。

逆に、学習者の母語であるアラビア語と目標言語である日本語の相違点も日本語教師が理解すれば、学習者の誤用の原因や習得

が困難と予想される項目もはっきりになってくるので、習得過程への改善につながるものが予想される。

現在エジプトで使用される日本語教科書は、アラビア語を母語とするエジプト人日本語学習者のために開発されたものはないが、本稿で得られた結果に基づき、学習者の母語の影響を考慮した教科書への作成への一歩としてなることを願う。

また、本稿で理解調査を行った結果、学習者がどんな解釈をしているのか、どうしてこのような誤用をしているかわかった。研究のためだけでなく、教師はこのような理解調査を教育課程の一部として導入することを勧めたい。このようにすれば、学習者はどのような理解をしているや、学習ストラテジーなどで明確になる点が多くなると思われる。教育課程の一部として、このような機会を設けることは非常に重要であると考えられる。

参考文献

浅田まり (1994) 「初級日本語学習者に対する格助詞の指導法—格助詞理解の助けと誤用を防ぐために—」 『第2回小出記念日本語教育研究会論文集』 国際基督教大学 p.65-78

生田守上級学習者における格助詞「を」「に」「で」習得上の問題点—助詞テストによる横断的研究から [in Japanese] Problems on Acquisition of Japanese Case Markers “Wo-Ni-De” for Advanced Learners of JSL – A Latitudinal Study using Particle Quiz – [in Japanese]

岩崎典子 (2004) 「日本語学習者による「に」の誤用」 『言語学と日本語教育Ⅲ』 くろしお出版 P.177-195

エジプト人日本語学習者の助詞「に」「で」の習得と誤用分析

Dr.Hanem Ahmed

مجلة وادي النيل للدراسات والبحوث الإنسانية والاجتماعية والتربوية (مجلة علمية محكمة)

加藤重広 (2008) 『日本語文法入門ハンドブック』 研究社 P.78-92

首藤公昭、田辺、吉村格助詞「に」の深層格推定：格助詞の意味再考 [in Japanese] Deep Case Estimation for Japanese Case Particle “NI” [in Japanese]

下野香織 (2005) 「多義助詞「に」の第二言語習得過程 認知語学的アプローチ」 『言語学と日本語教育Ⅲ』 くろしお出版 P.87-99

久保田美子 (1994) 「第2言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について」 『日本語教育』 82号 P.72-85

榮谷温子 『はじめましてアラビア語』 東京外国語大学教科書シリーズ p.77-82

迫田久美子 (2001) 「学習者の誤用を生み出す言語処理のストラテジー—場所を表す「に」「と」「で」の場合—」 『広島大学日本語教育研究 第』 11号 P.17-22

竹林一志 (2007) 『「を」「に」の謎を解く』 笠間書院
益岡隆志・田窪行則 (1987) 『セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』 くろしお出版

Nshina Yoko 助詞の表すモダリティー 構文表現と話し手の意図」 日本語教育連絡会議論文集:116-124. 2012

増田恭子 (2004) 「日本語学習者の場所格「に」「で」の誤用」 『言語学と日本語教育Ⅲ』 くろしお出版 P.197-211

蓮池いずみ(2004)「場所を示す格助詞「に」の過剰使用に関する—考察中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジー—分析」『日本語教育』122号 P.52-61

森山新 「韓国語母語話者の格助詞習得に関する認知言語学的研究」

Mosaad Zeyad www.drmosaad.com 「Qamoos El-nahw」

馬淵洋子 「格助詞「で」の意味拡張に関する一考察」 [in Japanese] A Study about the Historical Development of Japanese Case Particle "de" : from the Point of View of Semantic Extension [in Japanese]

八木公子 「初級学習者の作文にみられる日本語の助詞の正用順序—助詞思IJ'助詞の機能JJIJ, 機能グループ別に—」『世界の日本語教育』dl 6, 1996年5月』